

2015 年度前期 学生による授業評価アンケートの分析

－ 評価項目の妥当性の検証と学修成果に関連する要因の検討 －

IR センター

1. 本学の授業評価の取り組みについて

本学は、教員が自らの授業の向上・改善に取り組み、そのツールとして授業評価アンケートも用いてきた。そして、2015 年度より、教務及び学生生活支援システムの UNIVERSAL PASSPORT がスマホ対応になったことで、そのアンケート機能を用いた授業評価システムを導入し、授業の向上・改善をより充実させることになった。それに伴い、評価項目、対象授業、実施時期、実施方法の見直しをはかった。

評価項目の見直しでは、共通科目と科目個別の項目とし、共通項目については次の内容とした。

- ①教員が自らの担当授業の向上・改善に具体的に役立てることができること。
 - ②授業評価の構造として、教員の授業の取組・努力：1)授業姿勢、2)授業スキル、3)授業改善、学生の取組・努力：4)学習、5)学修成果を想定し、これらの要因を含めること。
 - ③本学らしさ（福祉の心、建学の精神「行学一如」）を含めること。
 - ④文部科学省の「大学における教育内容等の改革状況について」で示された授業評価の項目の要件に沿うこと。
 - ⑤講義科目を基として作成し、その上に演習・実技・実験・実習にも使えるように工夫すること。
- なお、選択肢は、5 段階評価では「どちらでもない」に集中しがちであること（中心化傾向）から、4 段階評価に見直した。

対象授業の見直しでは、授業評価は、教員に対する評価ではなく、授業レベルでの授業の向上と改善をめざしたものであることから、原則として、全授業を対象とした。

実施時期の見直しでは、授業に熱心に参加している学生を対象とする意図から、11 回目から実施できるようにし、授業期間の最終日までを回答期限とした。

実施方法の見直しでは、学生には授業評価についての UNIVERSAL PASSPORT の操作と考え方（授業の主体は学生）に関するビデオを事前に見てもらうことにした。そして、教員には、原則として、授業内での実施に協力をお願いし、実施に際しては教員の実施マニュアルにしたがって教示文を読み上げるだけとして、教員の影響をできるだけ排除するように配慮した。

なお、受講学生（授業評価に回答した学生）には、回答期限後、1 ヶ月間、受講の授業の結果を公開した。また、授業ごとの集計結果について、授業選択の参考として、学生に、本学ホームページで学内公開した。全学及び学科等ごとの結果については、本学ホームページで一般公開した。教員は、授業ごとに、目標設定と数量評価及び記述評価に対するコメントを当該授業の受講学生と次年度の当該授業の受講学生に提示し、授業の向上・改善に取り組むことにした。

2. 授業評価アンケートの構成と回答学生数

本学の 2015 年度前期授業評価アンケートの構成は以下のようになっている。

- I. 基本属性：所属学部学科・研究科専攻分野、学年、性別、この授業の履修の目的・理由

- II. 学生の取り組み方：出席率、授業時間外学習の時間、シラバスの確認、学習意欲、授業への協力
- III. 教員の取り組み方：学生の身になったわかりやすいシラバスの内容、シラバスに沿った授業、適切な話し方や声の大きさ、板書・プレゼンテーションの使い方、補助教材等の活用、質問しやすい工夫、授業環境に応じた配慮、授業への熱意、適切な授業構成、授業方法の工夫、総合的な授業の効果
- IV. 授業：適切な分量、適切な進行ペース、わかりやすさ、深まり
- V. 学修成果：理解度、目標到達度、興味関心、知識・技能・態度の修得、自ら調べ考え行動する学修経験、多角的な見方、総合的な満足度
- VI. 自由記述：よかった点、改善してほしい点や要望等

項目の中で、建学の精神（行学一如）は「自ら調べ考え行動する学習経験」として表した。「福祉の心」は教員の取り組み方と授業に関する項目の設定に際して基本的に心がけた。特に、「学生の身になったわかりやすいシラバスの内容」「授業環境への配慮」によく表れている。

回答者はのべ人数で 28435 人であった。

3. 講義科目と演習・実技・実験・実習等科目との差

講義科目と講義以外の科目（演習・実技・実験・実習等）の項目ごとの評価平均値を、学生の取り組み方と学修成果については図 1 に、教員の取り組み方・授業については図 2 に示した。

平均値の差の検定の結果、学生の取り組み方では、シラバス確認以外は有意な差が認められ、講義以外科目が講義科目よりも高かった。学修成果では、いずれの項目でも有意な差が認められ、講義以外科目が奥義科目よりも高かった。教員の取り組み方では、いずれの項目でも有意な差が認められ、講義以外科目が講義科目よりも高かった。

評価項目は講義科目を基に作られているが、講義以外の科目にも十分適用されることが示された。

4. 出席率と授業評価の関連

出席率ごとの評価平均値を、学生の取り組み方と学修成果については図 3 に、教員の取り組み方・授業については図 4 に示した。

一元配置分散分析の結果、いずれの項目でも、有意な差が認められた。出席率が高いほど、学生の取り組みも、学修成果も高く、教員の取り組みに対する評価も高いことが示された。

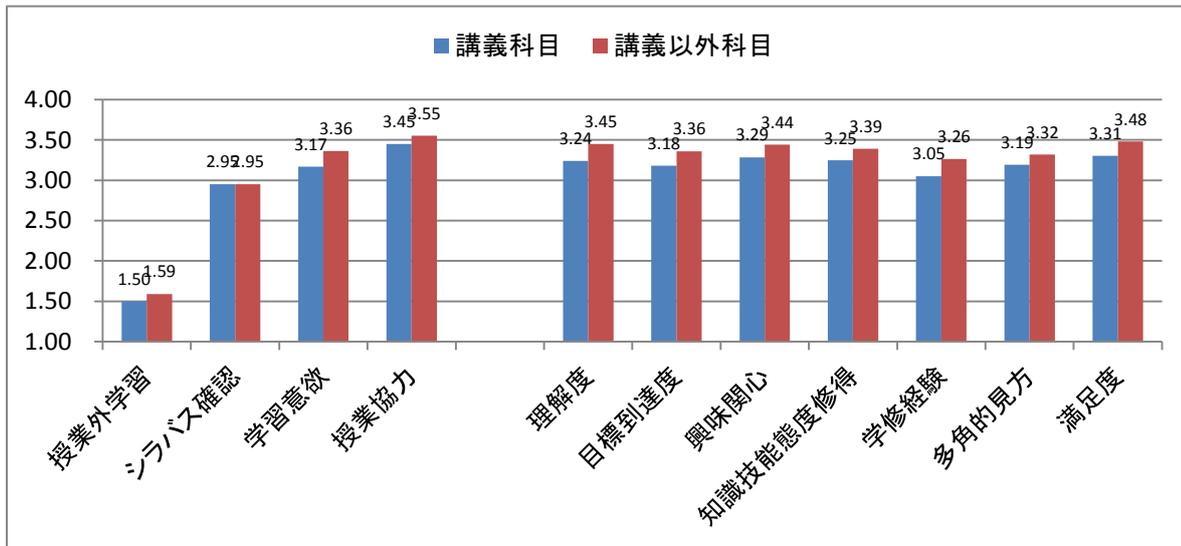


図1 科目種別ごとの学生の取り組み方（左）と学修成果（右）

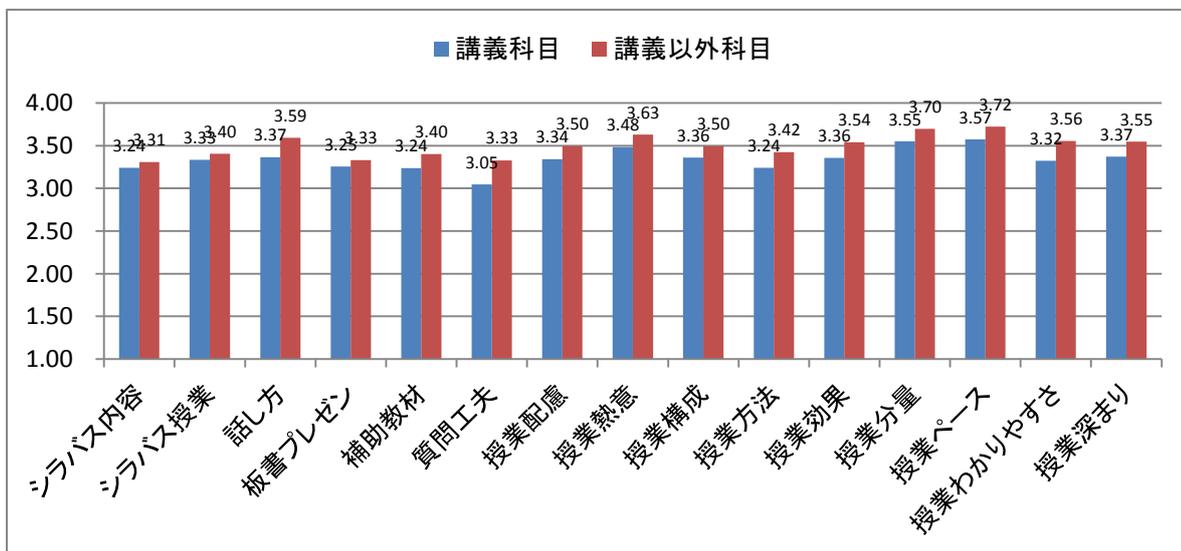


図2 科目種別ごとの教員の取り組み方・授業

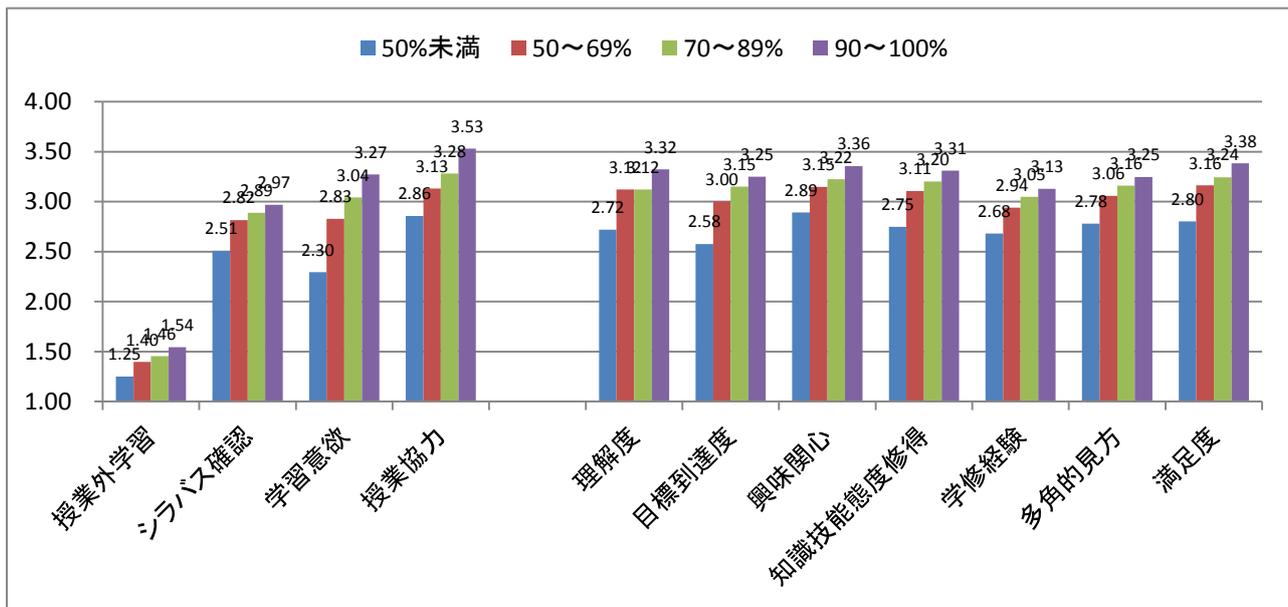


図3 出席率ごとの学生の取り組み方（左）と学修成果（右）

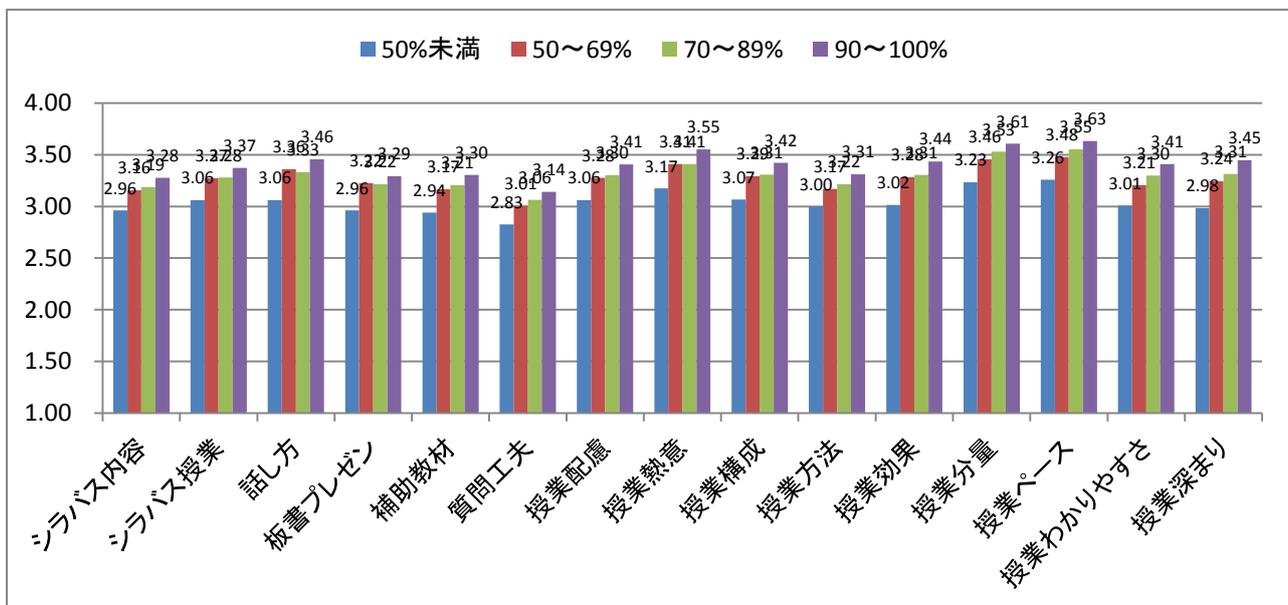


図4 出席率ごとの教員の取り組み方・授業

5. 教員の取り組み方・授業に関する評価項目の因子的妥当性について

今回、見直した共通項目のうち、教員の取り組み方・授業に関する評価項目について因子構造及び因子的妥当性を検討した。

出席率を70%以上と回答したデータについて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、3因子構造が見出された。第1因子は教員の取り組み方、第2因子は授業のうち進行ペース・分量、第3因子は授業のうち深まり・わかりやすさであった。

それぞれの因子について、因子負荷量が高い項目で下位尺度を構成し、信頼性係数を求めると、教員の取組では $\alpha = .927$ 、授業の進行ペース・分量では $\alpha = .816$ 、授業の深まり・わかりやすさでは $\alpha = .857$ で、十分に高い値が得られた。

したがって、今回の教員の取り組み方・授業に関する評価項目は因子的妥当性があることが示された。

表 1 教員の取組・努力に関する因子分析の結果

No.	項目	教員の取り組み 方	授業の進行ペー ス・分量	授業の深まり・ わかりやすさ
Ⅲ5	補助教材等の活用	.834	.004	-.134
Ⅲ6	質問しやすい工夫	.767	.004	-.116
Ⅲ10	授業方法の工夫	.760	-.004	.007
Ⅲ7	授業環境に応じた配慮	.725	.003	-.000
Ⅲ9	適切な授業構成	.717	-.005	.133
Ⅲ4	板書・プレゼンテーションの使い方	.686	.007	-.001
Ⅲ2	シラバスに沿った授業	.663	.001	.000
Ⅲ1	わかりやすいシラバスの内容	.629	-.000	.006
Ⅲ8	授業への熱意	.567	-.005	.240
Ⅲ11	総合的な授業の効果	.557	-.007	.380
Ⅲ3	適切な話し方や声の大きさ	.535	.003	.204
IV2	授業の適切な進行ペース	.001	.823	.003
IV1	授業の適切な分量	.003	.792	.002
IV4	授業の深まり	.006	.000	.798
IV3	授業のわかりやすさ	.003	.113	.773
	因子間相関		.421	.789
				.543

6. 学修成果に関する評価項目の構造について

今回、見直した項目のうち、学修成果に関する評価項目について因子構造を検討した。

出席率を 70%以上と回答したデータについて、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、1 因子構造が見出された。信頼性係数は $\alpha=.936$ で、十分に高い値が得られた。

表 2 学修成果に関する因子分析の結果

No.	項目	学修成果
V4	知識・技能・態度の修得	.861
V2	目標到達度	.848
V3	興味関心	.846
V7	総合的な満足度	.831
V6	多角的な見方	.830
V1	理解度	.826
V5	自ら調べ考え行動する学修経験	.747

7. 学修成果に対するパス解析

出席率を70%以上と回答したデータについて、学修成果を従属変数、教員の取り組み方、授業の分量・ペース、授業のわかりやすさ・深まり、授業時間外学習、シラバス確認、学習意欲、授業協力を独立変数とする重回帰分析（変数増加法）を行った。

また、学習意欲及び授業時間外学習をそれぞれ従属変数、教員の取り組み方、授業の分量・ペース、授業のわかりやすさ・深まるを独立変数とする重回帰分析を行った。

その結果、図5に示すパス図になった。

結果を踏まえると、学修成果に影響している主な要因は、授業のわかりやすさ・深まり、教員の取り組み方、学習意欲であることが示唆された。しかも、この3つのモデルの場合で $R^2=.713$ であり（データの71.3%を説明）、授業時間外学習、授業の分量・ペースを加えたモデルの場合とそれほど違いはなく、影響力が大きいことが示される。また、教員の取り組み方は授業のわかりやすさ・深まりとかなり強い相関を示し、関連が強いことが示された。さらに、教員の取り組み方は学習意欲や授業時間外学習にも影響していることが示された。

なお、授業のわかりやすさ・深まりも学習意欲に影響しているが、その影響は小さかった。また、教員の取り組み方がすぐれている場合に、授業の分量・ペースが適度であると、学習意欲が喚起されず、授業時間外学習も短いことも示唆された。

したがって、教員の取り組み方と授業のわかりやすさ・深まりが教育の質を表しており、これらをより高めることが学修成果を高めることにつながると思われる。

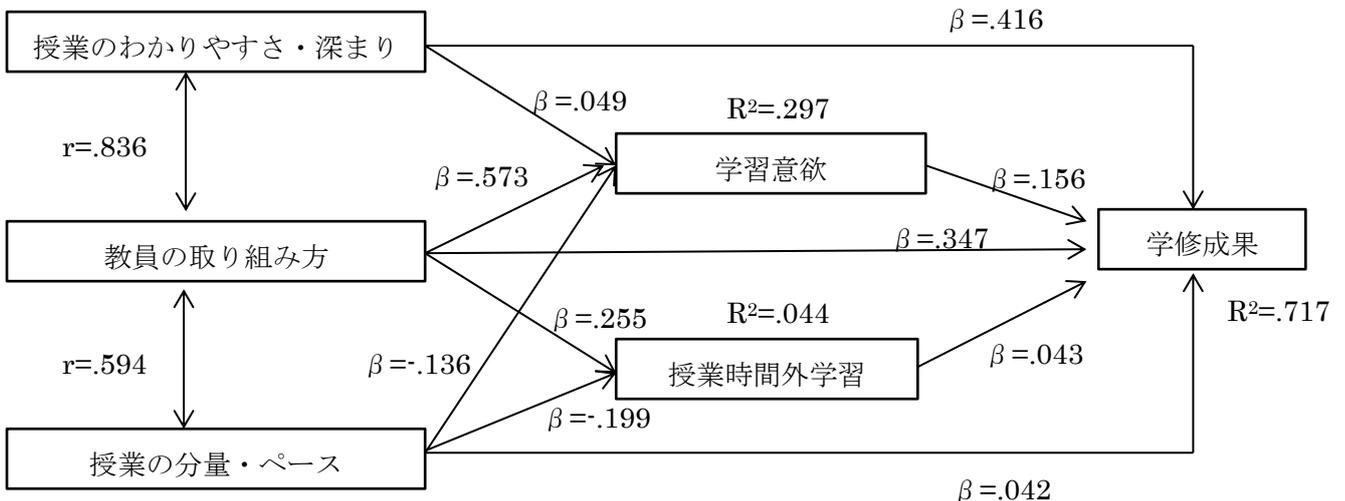


図5 学修成果に対するパス図